

浦賀文化

第76号

令和6年1月1日発行

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

オランダ語を話した 浦賀奉行所の与力



ハイネ画「ペリー久里浜上陸図」

ペリー来航時におけるアメリカ側の記録である「ペリー日本遠征記」には、ペリーたちから見た当時の日本の様子が当然ながら外国からの視点で客観的に描かれている。これらの描写は日本に残された史料からは見ることができない視点で日本人の様子を伝えてくれている。特に対応に当たった香山栄左衛門・中島三郎助をはじめとする浦賀奉行所の与力や同心たちの知識・教養の豊かさや好奇心の強さに関する描写に目をひかれる。

嘉永六年六月九日（一八五三年七月一四日）の大統領親書受け取りが行われた二日前、事前折衝後の饗応の席での様子である。「彼らの知識や一般的な情報も、優雅で愛想の良いマナーに劣らず優れていた。身だしなみだけでなく、教養もなかなかのもので、オランダ語、中国語、日本語に堪能で、科学の一般原理や世界地理の諸事実にも無知でなかった。」（『ペリー艦隊日本遠征記 上巻』万来舎）

ここで「堪能であった」というのはオランダ通詞堀達之助や立石得十郎のことかとも思えるが、応接にあたったオランダ通詞だけでなく香山や中島もオランダ語が「堪能であった」ともとれる。香山もオランダ語をよく理解していたか、あるいは多少は話すことができたのかもしれない。このことには信憑性がある。というのも実は浦賀奉行所の与力だった者がオランダ語を話したという記録がある。河元由美子氏が『洋学史研究』第二三号で紹介しているが、嘉永七年正月（一八五四年二月）、再び来航したペリー艦隊のマセドニア号に乗り込んでいた士官スプロストン（John Glendy Sproston）の記録「A Private Journal of John Glendy Sproston」には役人の合原猪三郎がオランダ語をよく話し英語の読み書きも多少出来たという記録があるという。また、ペリー艦隊に随行していた画家W・ハイネ（Wilhelm Heine）も合原猪三郎について「まだ三十歳に達していないが、非常に親切で極めて教養のある人物だった。かなり流暢にオランダ語を話し、英語も熱心に勉強して、すでに大きな進歩を上げていた。」（『ハイネ世界周航日本への旅』雄松堂）と記している。下田開港のため

に再置された下田奉行所の役人であった合原猪三郎は、のちに神奈川奉行並や外国奉行など外交関係の要職を歴任して最終的には大目付にまで出世している。元は浦賀奉行所の与力で、兄は砲術家で知られる与力合原操蔵である。ここでは合原猪三郎にばかり注目してしまったが、「ペリー日本遠征記」で「彼ら」と記してある以上、他にも浦賀奉行所の与力や同心の中でオランダ語ができる者がいた可能性は否定できないだろう。

それでは浦賀奉行所の与力たちはどのようなにしてオランダ語を習得したのか。オランダ通詞たちから学んだと考えるのが一番自然だろう。オランダ通詞たちはペリーがやって来る十年前の天保十四年（一八四三年）から三年交代で浦賀に詰めていたがその三年で浦賀奉行所の与力や同心たちにオランダ語の手ほどきをしてきた可能性はある。なにより浦賀には、英語圏からの異国船ばかりがやってきていたので、オランダ語を覚えるとしたら身近なオランダ語の話者であったオランダ通詞からであっただろう。

しかしながら浦賀奉行所の与力・同心たちがオランダ語に触れるのは通詞たちによってだけではなかった。弘化二年（一八四五年）頃より始まった西洋流砲術の習得もまたその機会であった。西洋流砲術では号令や銃器類の用語にオランダ語が用いられていたため、習得するにあたっては単語レベルではあったかもしれないがオランダ語に触れていたことにはなる。異国船との応接や西洋流砲術の習得が任務となっていた彼らにとってオランダ語は職務上身近な言語であったと言える。

（山本 慧）

★参考資料

- 『ペリー艦隊日本遠征記 上巻』（万来舎）
- 『ハイネ世界周航日本への旅』（雄松堂出版）
- 『華山代官江川氏の研究』 仲田正之著（吉川弘文館）
- 『幕末期軍事技術の基盤形成』 神谷大介著（岩田書院）
- 「開港地に於ける黒船艦隊」
- 「役人との私的交流及び日本庶民の黒船観察記」
- 河元由美子著『洋学史研究』第三号
- 「浦賀同心の西洋流行進めめぐり」
- トントントンの太鼓に合わせて」
- 「三浦半島の文化」第三号

浦賀奉行所跡の発掘調査（その四）

安政二年以降の浦賀奉行所の石垣と石橋



浦賀奉行所跡は、「現状では西側を除く北・東・南の三面が安山岩切石の布積み石垣で囲まれています。詳細な調査はこれからですが、東面は簡易な写真測量が行われています。」

東面石垣は現状で三段（最下段は上部を除き埋没）確認できますが、安政二年（一八五五年）の増改築以降の炊出し所門前の石橋架橋痕（下図①）と

考えられる切込み部や切石組の排水溝出口跡三か所、最下段石垣の段差（下図②）、北端部の算木積み（下図③）等が確認されました。東面石垣の石材は両端部を除き一辺四〇cm前後の方形で四周に江戸切りと言われる縁取りが施され、表面の仕上げも北・南面の石垣と比べ丁寧です。三面とも上部に凝灰岩（ぎょうかいがん）

岩切り石が一列積まれています。この部分は明治時代以降のものと考えられます。

北及び南面の石垣は、安政二年に敷地が拡張されているにも関わらず石積みの継ぎ目が確認できないことから、安政二年以降の姿かと思われ。また、西面の一部は素掘りでした。

なお、東面にある安政二年以降の石橋（第Ⅲ期の石橋）は、鉄板敷きに覆われ十分な調査はできませんでしたが、令和三年（二〇二一年）一月に鉄板が取り除かれて大半が目視可能な状態（第3図）になりました。この石橋は略測ですが、幅約二一cm、厚二一〜二四cm（側面からみると上面が弧状にわずかに膨らむも下面は平坦）・長一五一cm以上を測る石材を一五本前後並べ、端部には他の石材より僅かに高まりがある縁石が置かれています。石材はいずれも安山岩です。また、現存石橋が乗る石垣の部分は五cm前後上面が削られ、端部は斜めで石橋縁石と密着する形状になっており、石橋下面東側の石積みは石橋架橋のため内側に突出しています。

安政4年以降の浦賀奉行所



南

北

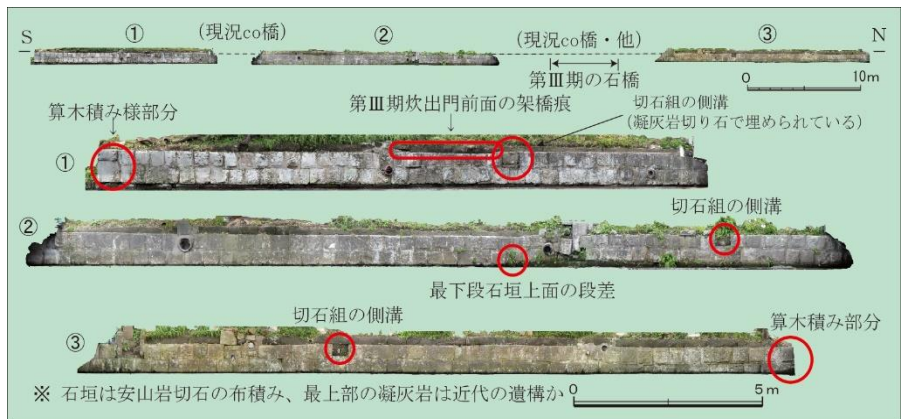
東

浦賀奉行所跡を見学される際は石積の様相の違いや付帯施設の痕跡などを探してみてください。いかがでしょうか。

（中三川 昇）



第3図 石橋の外側と内側



浦賀奉行所役所跡東面石垣の現況

★参考資料

- ・浦賀奉行所（役所）跡の試掘・確認調査
- ・『浦賀奉行所開設301年 浦賀奉行所跡』
- ・『浦賀奉行所開設301年 浦賀奉行所跡』
- ・『浦賀奉行所開設301年 浦賀奉行所跡』

浦賀コミセン分館特別展

ペリー来航と鳳凰丸

一目指せ！浦賀海防の西洋化—

ペリー来航を契機に、ここ浦賀の地で日本初の大型洋式軍艦が建造されました。海防の一拠点としての浦賀とそれに関わった人々についての展示をおこないます。

1/27(土)～2/4(日)
10:00-17:00
浦賀コミセン分館（郷土資料館）

Dookcafé 4

浦賀船渠株式会社は四年の準備のち、明治三十三年（一九〇〇年）一月に操業を開始。浦賀工場の初代所長になったのが櫻井省三である。浦賀船渠は、六月までに艦船一五隻が入渠、修理を行う。と同時にシヤラン船（運搬貨物船）竣工を皮切りに、櫻井が所長を務める四年の間に、外国からの受注で砲艦を二隻作り上げ、浦賀は造船に本格的に踏み出した。

櫻井は、加賀藩士の子として生まれる。優秀な藩士子弟として選出され、七尾軍艦所で教育を受ける。明治八年、横須賀製鉄所の付属学校「覺舎」を優秀な成績で卒業し、同年フランスに渡り難関シエルブールの造船学校に進学する。帰国後、本造船の礎を築く。

造船を学ぶ傍ら、現地の料理も自ら学び、帰国後は自宅で料理教室を開催、フランス料理の本を出版、明治・大正時代の日本に西洋料理を紹介した。

横須賀製鉄所が生んだ造船界のエリートの人、櫻井省三は日本の家庭料理が健康で美しくなることを目指して研究するという多才な一面も持っていた。（江）

